

事業2 研究・臨床実習期間中の海外渡航支援

番号	氏名	渡航先	国・地域	渡航先での受入期間
1	M・N	Gesundheitszentrum Venloer StraBe(フェンローラー通り診療所)	ドイツ	2024/5/6～2024/5/24
2	K・H	Gesundheitszentrum Venloer StraBe(フェンローラー通り診療所)	ドイツ	2024/4/8～2024/4/26
3	S・M	Gesundheitszentrum Venloer StraBe(フェンローラー通り診療所)	ドイツ	2024/5/6～2024/5/24

令和6年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科	6年	学籍番号 : *****	氏名 : M・N						
渡航先国 : ドイツ									
受入機関名 : フェンローアー診療所									
渡航先機関での受入期間 :									
令和	6年	5月	6日	～	令和	6年	5月	24日	(19日間)

【スケジュール】

月曜日・火曜日・金曜日 : デュッセルドルフ医師会館にて篠田先生のご講義

水曜日・木曜日 : フェンローアー診療所にて問診・外来実習

【目的】

ドイツでの様々な医療制度は日本とどのように異なっているのか、そしてどのような背景の違いがあるのかについて幅広く学びたいと思い、実習に参加いたしました。また、ドイツには日本と異なる家庭医の制度があるため、診療科の隔てなく診察を行う篠田先生の外来見学を通してドイツで実際に行われている家庭医としての診療を経験したいと考えおりました。

【内容】

○篠田先生のご講義

ドイツでの予防接種の制度や健康保険制度、健康診断・がん検診制度について詳しく教えていただきました。どの制度においても日本と異なる点が多く存在し、国民性や経済面、公衆衛生学を考慮したシステムになっていることを実感しました。また、コロナウイルスによるパンデミックでのヨーロッパの医療状況や、先生が医師になられてから40年ほどの間にドイツで治療法が大きく進歩した疾患についてお話をいただきました。デュッセルドルフにある検査所も見学させていただきました。

○フェンローアー診療所での実習

主に日本人の患者さんに問診をとらせていただき、その後篠田先生の外来を見学させていただきました。家庭医である篠田先生のもとに来られる患者さんは様々な訴えを持つ方が多く、問診をとりながら鑑別疾患を考えることが難しかったです。また、外来では血圧測定や聴診、触診をさせていただきました。

【成果】

○篠田先生のご講義

ドイツの様々な医療制度は日本と異なる点が多く、合理的で、核心をついていると実感する機会が多くありました。予防接種制度については、ドイツでは 6 種混合ワクチンが実施されており、日本での 4 種混合ワクチンと比較し、少ない接種回数で抗体を獲得することができること、ドイツでは 2019 年 11 月より麻疹に対するワクチンを打たない場合に 250€ もの罰金が科されるというお話を伺いました。非常に感染力の強い麻疹ウイルスに対してこれほどの強いワクチン義務が課されていることにドイツにおけるワクチンの認知度の高さを実感しました。またドイツには Robert Koch Institute(RKI) という感染症・疫学の権威をもつ機構が存在し、毎年研究内容を公開するだけでなく、一般人でも理解できるようラジオで研究の過程を教えてくれるとお聞きしました。RKI は医師だけでなく物理学者や數学者も構成員であり、多職種が感染症について研究し、公開することで、国民としての感染症に対する意識が向上する素晴らしい機構であると感じました。

医師会についても日本との大きな違いを学びました。日本とは異なりドイツでは医師は全員医師会に所属しなければならず、定期的な学会への参加義務や試験があります。ドイツの医師は新しい治療薬など最低限の最新の情報を全員が得ることができていているであろうというシステムに非常に魅力を感じました。コロナウイルスによるパンデミック時には病床が不足する状況の中、麻酔科医が毎日受け入れ可能人数を発表しあうというシステムを政府が決定する以前に医師会が創り上げ医療を充実させたというお話を聞き、政府の働きを待つ前に行動する医師会の団結力と行動力を驚きました。

ドイツではがん検診も充実していると実感しました。婦人科癌、乳癌、皮膚癌、前立腺癌、大腸癌など様々な癌に対して検診対象年齢や期間が決められており、中には検診に行かなかつた場合に通知が届く制度も存在し、丁寧にスクリーニングがされているようでした。

ヨーロッパでは H.Pylori の除菌が進んでいることもあり、ドイツでの人口当たりの胃がんの罹患率は日本の 4 分の 1 ほどで非常に少なく、胃潰瘍や十二指腸潰瘍はほとんど診なくなつたと先生はおっしゃっていました。

○フェンローラー診療所での実習

家庭医である篠田先生の診察に来られた患者さんの問診をさせていただきましたが、家庭医という診療科の縛りがない中で問診をとるのは初めての経験でしたので非常に貴重な経験となりました。問診の後に外来見学をさせていただくと、問診では聞きそびれていた重要な既往歴や患者さんの心理的、社会的背景など多くの要素について患者さんは篠田先生に話されており、自身の力不足を実感するとともに、先生と患者さんの間で築かれている強い信頼関係を肌で感じました。

篠田先生の患者さんは高血圧などいわゆる生活習慣病の改善にむけた通院をされている方

が多く、患者さん一人一人にあったアドバイスをされている先生の診察が印象的でした。特に、「飲酒量が多いなら普段よりいいお酒を少しだけ飲めばいい」というアドバイスによって生活習慣改善に積極的になり悲観することなく生活を楽しむことができている多くの患者さんを見たし、私も将来患者さんが人生を楽しみながら考えを変えることでリスクファクターを減らすことのできる医師になりたいと強く思いました。

また、高血圧の患者さんには24時間血圧測定を行っており、診察中はそれほど高くない血圧でも就寝中や仕事中に非常に高血圧になっている方の結果を実際に見せていただき、降圧剤の量を判断する上で24時間測定は非常に有意義なものであると実感しました。

【今後の抱負】

今回の実習を通して、ドイツの様々な医療制度や疫学といった知識的な面においてだけでなく、外来での患者さんとの信頼関係の築き方などコミュニケーションの面においても大変勉強になりました。デュッセルドルフには日本人の駐在員が多く、数年ごとに海外に移住する方や半年ごとに日本とドイツを行き来する方など、一人一人の事情にあわせた国際的な視点を持った長期的なアドバイスが必要とされている中、篠田先生が患者さんの細かな事情を考慮しながら話されているのを見たし、今後自分が働く際にも血液検査などのデータのみにとらわれるのではなく、患者さんの生活環境などの背景を汲み取り、適切な言葉をかけられる医師でありたいと思いました。また、篠田先生はこれまでご自身の患者さんで脳卒中や心筋梗塞を誰一人として起こしていないと伺い、リスクファクターに誠実に向き合い治療を行うこと、そして治療を長期的に継続して行うためには医師として信頼されることが必要不可欠であると実感しました。

最後になりましたが、実習を受け入れてくださいり、手厚いご指導をして下さった篠田郁弥先生、秘書の稻垣様、フェンローラー診療所の先生方、スタッフの方々大変お世話になりました。本当にありがとうございました。そして、岸本忠三先生と奨学金採択の関係者の方々、このような貴重な経験させていただき心より感謝いたします。今回の経験を通して、海外に視野を広げ新たな視点を得て医療に従事することの重要性を感じました。今後は医師または研究者の立場として常に海外にも目を向け、日本の医療に貢献できる存在になれるよう勉学に励んでいきたいと思っております。

令和6年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科	6年	学籍番号 : *****	氏名 : K・H
--------	----	--------------	----------

渡航先国 : ドイツ
受入機関名 : Gesundheitszentrum Venloerstra β e
渡航先機関での受入期間 : 令和 6年 4月 8日 ~ 令和 6年 4月 26日 (19日間)

(1)概要

4月8日から26日にかけて、ドイツのデュッセルドルフにある Gesundheitszentrum Venloerstra β e 診療所にて実習を行いました。

(2)目的

ドイツでの総合診療と公衆衛生について知り、日本との違いを学びたいです。ドイツでは、家庭医制度があり、総合内科として common disease を問診し、日本でも多く対応するされる疾患を経験したいです。また、ドイツと日本の高齢化という類似点で、ドイツの保険制度の比較を行いたいです。

(3)実習内容

<スケジュール>

実習内容

月	レクチャー
火	レクチャー
水	外来見学
木	外来見学
金	施設見学等

<外来見学>

外来見学では、初診から定期健診の患者まで多岐にわたる疾患を見ることができました。診療所に来られる患者さんは、日本からのドイツ駐在員の方が多く、篠田先生がデュッセルドルフに滞在する日本人の医療を支えていらっしゃることがわかりました。先生が診察される前に、私たち自身で患者さんから問診をとり、鑑別診断を考え、病状経過を評価する一連の流れをさせていただきました。その後、先生に報告し、先生の外来の様子を見学させて

いただきました。

最初は、問診する際に焦点を当てて聞けば良いのか、どの情報が重要なのか、全く分からず、大変時間がかかりました。ただ、篠田先生の外来を見学していくうちに、まず病状の変化、そして薬の副作用、今後起りうる症状の説明、そして生活上の変化など、重点を置くべきポイントが徐々に理解できるようになりました。先生がなぜその質問を患者さんに投げかけたのか、患者さんとのコミュニケーションの取り方など、要点を学びながら見学させていただき、外来の奥深さを感じ、大変興味深かったです。

先生の診察では、血圧測定、心音・肺音の聴診や打診、口腔・咽頭の観察、採血、心電図、呼吸機能検査、振動覚、深部腱反射など、身体所見の取り方も学べました。日本では、直接患者さんの身体診察をする機会がほとんどなかったため、貴重な経験になりました。特に、打診と聴診に苦労しました。打診はなかなか音を鳴らすことができず何度も練習し、少しづつ音が聞けるようになりました。聴診は聞き分けるが大変難しく、まだまだ勉強が必要だと感じました。また、日本の病院で見る機会のない鍼治療も見学させていただきました。

経験した症例の中で、印象に残っているものは、先生が高血圧の患者さんに何度も自分を責める必要がないということを伝えていらっしゃったことです。高血圧は遺伝的な因子が大きく影響しているということを丁寧に説明し、深刻なことを防ぐための服薬であると患者さんに啓蒙されていたことです。

外来にいらっしゃった患者からのドイツで生活に関するお話も得難い経験でした。デュッセルドルフに滞在されている日本人は、言語や制度の障害、欧州圏への頻繁な出張や他国への異動など、さまざまな不安を抱える中過ごされていることが分かりました。それぞれご家庭で抱えられている問題は異なり、生活背景も考慮した上で長年診察を行われている篠田先生の果たされている役割の大きさに感銘を受けました。

<レクチャー>

「ドイツの健康保険制度」から「暴力に対する医療介入 MIGG」や「生活習慣病」などさまざまなテーマでレクチャーを受けました。レクチャーの最後には、質問やディスカッションを行い、考えを深めました。特にドイツの健康保険制度は理解するのが難しかったです。国民皆保険という点では共通していましたが、ドイツでは法的疾病保険 (gesetzliche Krankenversicherung、GKV) とプライベート疾病保険 (private Krankenversicherung、PKV) に分かれていることを知りました。加入している保険によって補償される医療範囲が全く異なることが衝撃でした。また、肝炎のレクチャーの際には、先生が当時経験されたエピソードを交えながら話してください、大変興味深かったです。

<施設見学>

血液検査センターや産婦人科中川で見学させていただきました。

血液検査センターでは、デュッセルドルフにある全ての診療所の血液検査を行なってい

るとのことでした。開業医が協力し、この施設に集約して血液検査を行うシステムを作ったと伺いました。篠田先生もその機構の中で多大な貢献をされていると伺い、設立当時の話を知ることができました。

産婦人科中川は、デュッセルドルフで主に日本人を対象に開業しているクリニックでした。私が産婦人科志望ということもあり、ドイツでの産婦人科制度を知りたく、見学させていただきました。現地で直接連絡をさせていただき、突然のお願いにも関わらず、快く承諾してくださいました。特に、印象に残っていることは、ドイツでは緊急避妊用ピルが医者の処方箋なしに薬局で買えることでした。薬のアクセスへの敷居が下がるという点で、問題も指摘されているようです。また、お産に関しては、助産師さんである *Hebamme* と呼ばれている方々によるお母さんと赤ちゃんへのサポートが大変充実していることを知りました。中川先生からのお話を通して、子育て中も絶えず医療に関わって来られた先生の生き方が大変刺激的でした。

(4)今後の抱負

デュッセルドルフでの滞在を通して、さまざまな人との出会いがあり、海外でご活躍されている日本人に刺激を受けました。どの方も多方面にアンテナを広げ、常に貪欲に何事にも挑戦されていらっしゃいました。私もそのような姿勢で医者として働き、患者さんに貢献したいと強く思いました。また、日本医療ではなかなか時間的にも厳しいところもありますが、患者さんとの対話の時間を大切にしていきたいと感じました。

また、多くの課題も見つかりました。診療所の方とのコミュニケーションでは、自分の伝えたいことを上手く表現することができませんでした。気持ちが通じ合えた時の喜びを感じたからこそ、医学の勉強とともに、語学もより向上させる必要性を痛感しました。

今回の学びを活かして、世界を視野に入れた医療活動ができるように、日々励んでいきたいと思いました。

(5)謝辞

最後になりましたが、私たちの実習を受け入れ、ご指導くださいました篠田郁弥先生はじめとし、Gesundheitszentrum Venloerstraße 診療所のスタッフの方々、また多大なるご援助をいただいた岸本忠三先生に厚く御礼申し上げます。学生時代に海外で実習を行うという、このような貴重な機会をいただき本当にありがとうございました。

令和6年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科	6年	学籍番号 : *****	氏名 : S・M
--------	----	--------------	----------

渡航先国 : ドイツ
受入機関名 : フェンローアー通り診療所
渡航先機関での受入期間 : 令和 6年 5月 6日 ~ 令和 5年 5月 24日 (19日間)

〈スケジュール一覧〉

月	講義
火	講義
水	問診・外来見学
木	問診・外来見学
金	講義

講義・・・・・・・・ デュッセルドルフ医師会館にて篠田先生から講義

問診・外来見学・・・フェンローアー通り診療所にて問診・外来見学

〈目的〉

今回実習を受け入れてくださった篠田先生は、10代のうちに駐在員のご家族としてドイツに渡り、ドイツの医学部を卒業されました。その後40年間医療に従事し、そのうちの30年はデュッセルドルフにて総合心療内科の家庭医としてご活躍されています。ドイツの家庭医制度は日本と大きく異なる制度であり、その働き方を間近で見学できるというのは大変貴重な機会です。そのため、まずは家庭医制度を含めたドイツにおける医療制度や、日本人診療のドイツにおける実態を学ぶことを主な目的として掲げました。また、私はこれまで大学病院や市中病院での実習しか経験がなく、common disease が大きな割合を占める診療所へ行くのが初めてでした。こちらも普段の実習ではなかなか経験できないものなので、その病態や治療について学ぶことも目的としました。

〈内容〉

週3日、デュッセルドルフにある医師会館にて篠田先生からドイツ医療に関する講義を受けました。ドイツでの予防接種や生活習慣病、健康保険制度、健康診断とがん検診など、様々な内容について学びました。現地で長年活動されている先生からの言葉はやはり説得力があり、ドイツで医療に従事された日本人医師としての考え方やご自身の経験なども踏まえて、熱心にお話してくださいました。

また、週2日実習に訪れたフェンローラー通り診療所では、一日あたり数人の患者さんに対して問診を行いました。問診はこれまでの実習でも経験が無かったので、基本的な問診方法や鑑別診断について学ぶ良い機会となりました。問診が終わった患者さんについては、その後篠田先生の外来診察を見学し、自身の問診と先生の診察を比較しながら、ドイツにおける対応や治療方法などを学びました。篠田先生は患者さん一人一人に合わせて治療経過の確認や生活のアドバイスをされており、家庭医として医療に真摯に向き合っているのを感じました。

デュッセルドルフには複数の病院が共同で血液検査を行う検査所があったため、そちらを見学する機会もありました。

〈成果〉

篠田先生の熱意ある講義によって、ドイツの医療制度だけでなく、社会情勢やそれに対する医師のあり方を学べました。予防接種やがん検診においては、病気の罹患率に差があるため日本と異なる点が多く、どちらの国においても独自の医療制度が構築されているということを実感しました。講義全体を通して最も感銘を受けたのは、ドイツにおける医師の主体性が強いということです。コロナパンデミックの時には政治家の医療制度に関する決定を待たず、他院の医師同士でコミュニケーションを取りあい、患者の受け入れ体制を整えたと聞き、医師としての使命感に駆られた行動力を感じました。

診療所では、触診や聴診、打診、深部腱反射といった基本的な身体所見の診察手技を行いました。こういった医師の象徴とも言える基本的な診察を患者さんへ行うことで、医師としての尊厳を守ることができると教わり、非常に印象的でした。疾患としては喘息や高血圧、腰痛、耳鳴りなど、総合診療科ならではの幅広い疾患を診ることができ、また、common disease だけでなく、左心低形成既往の患者、Brugada 症候群患者など比較的稀な疾患に出会うこともできました。さらに、耳鳴りや偏頭痛の患者さんに対して、日本の病院ではほとんど見かけない鍼治療も見学できました。診療所を訪れる患者さんは、デュッセルドルフという土地柄もあり、日本人の駐在員とそのご家族が多かったです。篠田先生が慣れないとドイツの地で生活される患者さんを思いやった声掛けをし、患者さんがそれを聞いて安心するというやりとりが何度も見られました。疾患の知識だけではなく、公衆衛生的な側面や社会情報も踏まえながら診療することの重要性を実感しました。

検査所を訪れた時には、検査をする技師だけで無く検査を確認する医師の姿もあったことに驚きました。デュッセルドルフでは、医師が病院で見た採血結果に納得がいかなければ、検査場まで足を運び、実際に検査を確認しに来られています。検査所で出会った方々からは生き生きと仕事に取り組まれている様子が見受けられ、医療人としての誇りを持った姿を垣間見た気がします。

〈抱負〉

今回の実習で学んだ中で、将来医療に従事するに当たって必ず心に留めておくべきだと

思ったことが二つあります。まず一つ目は、患者さんの抱えている問題を根本的に解決するには、身体的所見だけでなく社会的背景を考慮することが必要であるということです。今回問診・外来見学を行ったどの患者さんにも職業や住居、人間関係などそれぞれ社会的背景があり、抱えている病態や行うべき治療と決して無関係ではないということが、診療全体を通して身にしみてわかりました。そして二つ目は、日本の医療に貢献するためには海外にも目を向け続けなければならないということです。ドイツではまず予防接種について、6種混合ワクチンの導入やHPVワクチンの普及に日本よりも発展した医療を感じました。また、ピロリ菌除菌を日本よりも早くから行ったことで、現在の胃癌の罹患率が日本の6分の1であるということにも驚きました。社会情勢への深い知見を常に持ち、海外の実態も考慮した広い視野を得ることで、より良い医療を実践する医師を目指していきたいです。

〈謝辞〉

最後になりましたが、岸本忠三先生と奨学金支給にあたる関係者の皆様、今回の海外実習にご支援いただきまして誠にありがとうございます。日本では学べなかつたであろうドイツ医療制度や社会情勢、実際の診療、そしてドイツ医師の医療への向き合い方を目の当たりにし、大変充実した海外実習となりました。この実習中に得た知識・経験を糧に、さらに勉学に励んで参ります。